

# 壮年会だより

平成23年12月度中原寺仏教壮年会だより Vol.4



## 11月の行事 November

◆11月5日(土) 午前10時

【お仏具磨き・本堂清掃に参加させて頂き】

浄土真宗では永代経、降誕会、彼岸会などの法座が営まれています。中でも報恩講は浄土真宗の流れを汲む門信徒にとっては一番大切な法要であり、門信徒の我々はその法要が営まれる前の大切な仏具磨き並びに本堂、境内等の清掃作業が11月5日(土)に行なわれました。

壮年会、婦人会の方々20数名が参加され、11月に入ったが当日は朝から暖かく皆和やかに作業が進みました。

午後からは婦人会の常例法座が営まれ壮年会も参加させて頂きましたが仏教婦人会の綱領を、「深く如来の本願を聞きひらき、み法の母として念仏生活にいましめます・・・」と読み上げられました。

午後2時半【壮年会法座】

その後、門法会館で壮年会の法座があり、副住職の歎異抄13条の講義をされ受講させて頂きました。

合掌 村田 太喜夫 記



の幻想的風景を堪能できず残念でした。辛うじて壮年会のみなさんの尽力で灯籠の点灯風景はキープできた。

雨が上がった後多数の信者の参集により「初夜礼讃偈」の法要を経てあずき粥のおときで楽しいひと時を味わった。21日11時から日中法要、法話(麻田秀潤師)昼のおときを頂いた後、ご満座法要、法話(麻田秀潤師)に続いて住職の締めくくりの挨拶で無事報恩講法要の行事が終了した。

住職の挨拶で「これが自分が主役で行う最後の報恩講執行である。」との言葉が印象的でした。ご苦労様でした。



◆11月19日(土)~21日(月)【報恩講法要修行】

宗祖・親鸞聖人の遷化の日1262年11月28日(旧暦)を中心に営まれる行事である。宗祖の恩徳を報謝する1年中でもっとも大切な法要である。また門徒にとって親しみ深い仏事でもある。本願寺三世・覚如が集会を「講」と称したことから名付けられ、「ご正報恩講」「お七夜」とも呼ばれている。

中原寺では、19日17時から予定の山門から参道への連綿と続く灯籠の点灯風景は雨にて中止。20日18時から親鸞聖人を讃える夜灯と透かし絵にもわか雨でそ

## 平成23年12月~平成24年2月壮年会行事

### 12月の行事

3日(土) 15時半 門信徒会役員会

18日(日) 13時半 壮年会役員会

(役員・監事・理事)

15時 壮年会法座

18時 年末懇親会

30日(金) 10時 山門・石段清掃奉仕

※当日お手伝い頂ける方は午前10時までにお集りください。

### 1月の行事

1日(日) 8時 元旦修正会・ご流盃の儀

21日(土) 13時 常例法座 講師：未定

29日(日) 14時 壮年会年次総会・新年会

### 2月の行事

18日(土)~19日(日) 東京教区仏教連盟結成記念日研修会

19日(日) 13時 常例法座

## 編集後記(壮年会12月会報)

今年の「壮年会だより」は、皆様のご支援をいただきながら、4名の担当理事(河合照夫、杉田善久、福島秀昭、高木史人)が分担し、無事に4回発行することができました。この会報では、中原寺主催の行事報告と行事予定、そして会員の方々の声を感話シリーズとしてお届けしましたが、いかがでしたでしょうか?「会員の声」をさらに充実させるために、9月号では皆様に「記事募集」をしましたが、残念ながら原稿はあまり集まりませんでした。この会報では、多くの会員の生の声を掲載していきたいと考えていますので、引き続き「記事募集」を行い、さらに皆様各人へ「記事執筆依頼」をさせて頂こうと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします(高木史人・記)

## 9月の行事 September

◆9月18日(日) 午前10時

【壮年会結成30周年・婦人会結成40周年記念】ご旧跡参拝旅行

今年は壮年会が創立30周年、婦人会が創立40周年に当たることから合同の記念行事として親鸞聖人ご旧跡寺院参拝バス旅行が実施されました。参加者41名(子ども2名を含む)。なおこの旅行記は、3ページの感話4で福島道宏さんから寄せられた投稿を記載いたします。

◆9月23日(金) 秋分の日 午後1時【秋の彼岸会法要修行】

おつとめ:「仏説阿彌陀經」、讃仏歌:「衆会」の儀式の後、講師田畑正久師による講話:「現代日本の医療文化と仏教文化」について、約1時間半に亘り有意義な講演がありました。田畑正久師は一昨年秋の第二十一回文化講演会にもお出でいただきました。大分県宇佐市の佐藤第二病院院長であり龍谷大学大学院教授としてご活躍。九州大学医学部在学中から仏教(浄土真宗)の研究、啓蒙に取り組み、医療と仏教の協力関係構築をめざして来られました。講演内容は、以下に紹介しております。なおこの内容は、殆ど去る9月17日の日経新聞夕刊の記事の抜粋であります。

講話:「医療と仏教の協力を」田畑正久師に聞く

外科医になった田畑さんはさまざまな患者に出会い、時に医療の限界を意識する。その隙間を埋めるのは学び続けた仏法の教えだった。手術で救ったがん患者も数年後に別のがんに侵され、最終的に死につかまれば医療の敗北になる。がんを手術で治し、再発したのをまた手術して、さらに再発した患者からは亡くなる前に「だまされた」といわれたりする。多くの方は老病死をなかなか受け入れられず、時には病院や医者へのせいにする。

老病死はあってはならないこととして延命治療から自然死、老衰で穏やかに死んでいくことができない。老衰に近い状態でも病院でなくなれば医療過誤ではないか、なんていわれかねない。いま、医療や福祉の現

場でみても人生をハッピーエンドで終える人は少ない。若さ、健康、役に立つといった物差しで幸せをめざして生きてきた誰もが老病にかかる。「周囲に迷惑をかける」と肩身の狭い思いをして死ぬというのでは?不幸の完成“で人生を終えることになりませんか?老病死に直面する人を若い元の健康状態に戻せないとすれば、現実を受け入れる形で苦しみ、悩みを救う取り組みが必要になる。老病死をおおらかに大きな視点で受け止める人生があるのではないのでしょうか。

医療の現場には、終末期医療でのホスピスなどを除けば宗教、仏教を取り入れて対応しようという空気はあまりない。生きているうちはお医者さん、死んだらお坊さんという垣根をどう乗り越えるのか。医療も仏教も人間の生老病死という四苦に立ち向かっている。同じ課題に取り組んでいるのに協力しあう関係にはなかなかない。病院に僧衣のお坊さんが出入りする光景が当たり前になってもおかしくないと思うのです。

医者は治る病気は治せるけど、治らない病気は治せない。お釈迦様はどんな病気でも苦しみを救うことができるという言葉があります。最善の医療を享受しながらも、最終的には老病死は仏様にお任せするというのが仏法の教えなのです。

時とともに訪れる老病死だけでなく、突然の災害や事故などに遭っても、被災者たちがその現実に立ち向かえるように支え、生きている人は日々与えられた場を一杯生き切る、というのも仏法の大切な教えです。



10月の行事 October

◆10月9日(日) 午後3時「歎異抄を聞く」勉強会  
講師：田畑正久医師

秋の彼岸会に講話された田畑正久先生が幕張メッセで開かれた「全国外科医学会研究会」に出席される日程の合間、急きょ9日の3時から開法会館で「歎異抄について」を聞くことになりました。先生は20年以上前から宇佐市の近くの寺で月1回「歎異抄に聞く会」を開催しているとのことで通算250回を重ねているとの事です。

急に話が運んだことから、皆さまにお伝えする時間がなかったのが残念でしたが、聞きつけた30名ほどが参加して再び先生のお話を聞くことができました。



私は幸いにして聴聞の機会に恵まれ、先生の宗教家や文化学者の説く「歎異抄」とは趣の異なる論旨にすっかり魅了されてしまいました。

◆10月16日(日) 午後2時【壮年会法座】副住職

出席者8名で第8条「念仏は行者のために、非行非善なり。云々」を読む。ここで親鸞聖人の否定する「行」とは「自力の行」であって、「他力の行」でないことが説かれました。副住職葬儀参列のため、1時間半で終了。以後場所を夢庵に変え、酒食を交え歓談すること2時間余り、散会。

◆10月22日(土) 午後1時半【第23回中原寺文化講演会】  
「ストレス社会をどう生きるか」 香山リカ

20年前私が精神科医になった時代は、バブルの絶頂期で日本の前途は明るく希望に満ちていた。そんな時精神科医になった私たちは先輩の先生から早く転職したほうが好いと勧められた。

しかし、バブルの崩壊後時代状況は変わり、国民の皆がいらいらし孤独の時代に入った。

過去13年間、自殺者が3万人余が続く異常な事態が続いている。今や精神科医がものすごく繁盛し、患者が殺到。うれしい悲鳴を上げている時代になった。

若者の中に「人間として生まれない方が良かった。」という想いが蔓延しつつある。又自分が何になりたいかという調査結果では、「猫」「雲」「鳥」と答えた若者が多かった。猫の気楽な生き方、のんびりしたマイペースの生き方に共鳴するものが多い。

長引く不況で就職難が続き、若者が、前途に悲観し生きる希望を失っている様子が目に見えるようだ。世の中の風潮として「勝ち組」「負け組」の選別が顕著になり、一旦「負け組」に編入されたら決して浮上できない諦め観が広がっている。

又、物さえあれば幸せな人生を楽しむことが出来るという間違ったマスメディアの報道に煽動され、最新のIT機器を持たないことへの屈辱感、劣等感さえ抱く人が多くなった。

3.11の東日本大震災は、これからの日本を見直す良い「きっかけ」になったと思う。立派な家にすみ、贅沢な生活が一瞬の津波の襲来によって崩れ去った経験はこれからの人生を如何に生き人間関係を構築すべきかを再考する良いきっかけになることを期待しよう。

人生の空しさを体験し、孤独に生きる寂寥感を味わい「絆」を求めて、結婚を急ぐ若者が増えているとの記事がマスメディアに目立つ今日この頃である。

喉もと過ぎれば暑さ忘れると言う一過性のものに終わらないよう希望するものです。人生は私たちが意図し、希望したように行かないものです。自分の思いのままになると考えることは、まさに驕りであり、傲慢と言うべきでしょうし、またそんなことで将来を悲観し絶望することもないでしょう。自分の人生はこれしかない硬直的に考えずにもっと柔軟に天命に従い自由に生きることが大事ではないでしょうか？ 現状が意に沿わなくとも少なくとも2~3年ぐらいは我慢すればやがて春が来ることを信じましょう。

以上、香山先生のお話をうかがい、私はこの様に考えました。

「人事を尽くして天命を待つ」という生き方は、一所懸命頑張ると言う生き方です。日本人は元来こういう生き方を伝統的に代々継承してきました。「がんばれ！」の一言がどれだけ失敗者や負け組の人の心を傷つけて来たことでしょうか。どう足掻いてもどうしようもない天の時(ついてない時)が有ります。そんな時は嵐の過ぎ去るのをじっと待つ心のゆとりが必要ではないかと思えます。香山先生の講演内容に即して、小生の若干の私見を加えて締めさせて頂きました。



感懐  
シリーズ4

【日帰り参拝バス旅行に参加して】



残暑とはいえ、秋の気配も感じられる九月十八日、壮年会結成三十周年、婦人会四十周年の記念行事として企画された合同での日帰り参拝旅行は、親鸞聖人にとって縁の深い常陸の国の二ヶ寺を訪ねるバス旅行になりました。

例年行われる一泊旅行では、いつも見送り専門でしたが、今回久しぶりに参加する事ができました。参加者四十一名は、定刻十時に市川から常磐自動車道を一路水戸を目指して出発、ご住職から今回の旅行は、東日本大震災で被害を受けた被災地に行くことが、少しでも復興支援に繋がるのではとのお話がありました。

途中、守谷、友部でトイレ休憩、車中で早めの昼食を済ませると水戸に到着。インターを降りて見えてきた風景は、あちこちの屋根に掛けられているブルーシートでした。

十二時、最初に参詣する二十四輩の一人唯信房が開基の信願時に到着、バスを降りて目に入った光景は参道入り口にある信願時の石碑が真中から折れ、山門本堂の屋根瓦が落ち、庫裏、墓石もかなり損壊していました。

そんな状況の中、坊守さん等が温かく出迎えて下さり、お寺の由来などをお話してくださいました。本堂前で記念写真を撮り、二十分後には次の目的地河田の報佛寺に到着、報佛寺は歎異抄を草した唯円が開山と伝えられる名刹。本堂は十一年前に再建されて震災の被害は少なかったようですが、山門は礎石を残して倒壊していました。地震・津波・原発・風評被害と東北三県をはじめ各地に未曾有の被害をもたらした惨事を見るにつけ、被災地の一日も早い復興と、平常な生活に戻れることを願わずにはられません。

バスは次の目的地、大洗にあるおさかな市場イエローポートへ。皆、復興支援の一助になればと沢山の(?)お土産を買いこんだ後、四時から奥にある、おさかな食堂でちょっと早い夕食です。テーブルに並びきれないほどのお料理とアルコールを充分いただいた後、六時にはほろ酔い気分で帰路へ、バスの中で再度仕上げのアルコール調整をしながら一路市川へ、渋滞で予定時間を過ぎましたが、途中下車の矢切駅に八時四十分は無事到着。

今回、石井さんにはバスの手配(優秀な運転手にガイドさん)から幹事役まで何かとお世話になりました。



福島 道宏 記